

全国高等学校におけるカリキュラム (保健体育) の実態

富岡元信*・佐々木吉蔵*・山田良樹*・冨田幸博*

(昭和 56 年 12 月 1 日受付)

The Actual Condition in the Curriculum of Health and Physical Education carried out at the Senior High Schools in Japan

By Motonobu TOMIOKA, Kichizo SASAKI,
Yoshiki YAMADA and Yukihiro TOMITA

The improvement of curriculum's basis has been carried out according to the social changes and the changes of people's demands towards education in the past decades. Thus, the experience was given much more weight in education during the 30's of showa and then the academic attainments during the 30's of Showa the scientific education during the 40's of Showa and the humanity was emphasized during the 50's of Showa. Since the 57 th year of Showa the new course of study was applied in turn.

Especially, it is obvious that demands of exercise due to social changes remind us of the role of physical education at school, so that it is more important to make people realize the necessity of physical exercise in order to keep up a life-long exercise program.

It is, therefore, true that the course of study stresses "developing physical strength" and "amalgamation of physical education with life" as the role of physical education at school. These pre not only to accomplish the object of physical education but also to make schools the place where students experience life-long exercise and learn how to take physical exercite into their lives.

In this study, based on the annual curricula collected from all over Japan, we tried to elucidate the relationship among the hours of classes, common compulsory subjects, and elective compulsory subjects focusing on how the events of physical exercises have been practised in the course of study.

I. はじめに

教育課程の基準の改善は、昭和 20 年代の経験志向型から、30 年代の学力志向型へ、40 年代の科学教育重視から次第に 50 年代の人間性志向型へと、社会の変動に伴い教育界への要請も変化してきたといえる。

特にその変動に伴う、運動需要の増加によって、学校体育のはたすその役割を考えるならば、生涯を通して運動を続けるように、運動についての理解を深めさせることがより重要なことといえる。

従って、学習指導要領では学校体育の役割として、「体力づくり」、「運動の生活化」等をあげているが、これは単なる体育の目標を達成するだけでなく、卒業後も継

続して日常生活の中に運動をとり入れ、生涯体育としての経験の場とすることが学校体育の大きな指命である。

そこで今回は、全国からとり寄せた保健体育の年間カリキュラムをもとに、現行学習指導要領における運動種目がどのように実施されているかを示し、これに考察を加え、内容の授業時数 (割合) や共通必修・選択必修等との関係を明確にするものである。

II. 方 法

昭和 55 年全国にまたがる本学学生の手をわずらわし、出身校及び隣接校から取寄せた保健体育の年間カリキュラムを資料とし、男女別・学年別・都道府県別に分けて

* 体育管理研究室

集計した。

さらに、地域における年間カリキュラムの相違、特色を調べ比較してみるという観点から、都道府県別に分けた資料を大きく10地区に区分して集計した。

(1) 地域区分

- ① 北海道
- ② 東北……青森・岩手・秋田・山形・宮城・福島
- ③ 北信越……新潟・長野・富山・石川・福井
- ④ 関東……茨城・栃木・群馬・千葉・埼玉・東京・神奈川県
- ⑤ 東海……静岡・山梨・岐阜・愛知・三重
- ⑥ 近畿……滋賀・京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山
- ⑦ 中国……鳥取・島根・岡山・広島・山口
- ⑧ 四国……徳島・香川・愛媛・高知
- ⑨ 九州……福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島
- ⑩ 沖縄

(2) 学校数・資料数

(3) 集計種目

- ・共通必修
- ・選択必修
 - ・第1選択 球技（バスケット，バレー，ハンド，サッカー，ラグビー）
 - 格技（男子のみ）
 - ダンス（女子のみ）
 - ・第2選択
 - ソフトボール，野球，テニス，卓球，バドミントン，スキー，スケート，なぎなた，相撲，レスリング，その他

(4) 集計方法

資料を都道府県別に分け、学年別・男女別地域別・月別に分けた。

III. 結果と考察

まずはじめに、各地域に取り組む前に、全ての資料数から体育の内容の取り扱いの全国平均を算出してみると、その結果は、下記に示す図1の通りである。また、現行指導要領にも記されているように、共通必修（体操、器械運動、陸上、水泳）と、選択必修（ダンス、格技、球技、第2選択）とに区別したものである。

この結果を分析してみると、全国平均男子においては、共通必修 37.2% となり、その内訳は、A) 体操・5.6%、B) 器械・9.0%、C) 陸上・14.8%、D) 水泳・7.8% の割合が示された。

全国男子平均	体操	器械	陸上	水泳	格技	球技			第2選択
						バスケット	バレー	サッカー	
	5.6	9.0	14.8	7.8	18.2	10.5	10.1	10.5	6.5
共通必修	37.2						3.8		3.2

全国女子平均	体操	器械	陸上	水泳	ダンス	球技			第2選択
						バスケット	バレー	サッカー	
	7.0	10.2	14.7	9.0	15.9	12.4	12.5	12.4	
共通必修	40.9						5.6		0.1
									0.3

図1 運動種目別全国平均

尚、女子においては、共通必修 40.9% となり、内訳は、A) 体操・7.0%、B) 器械・10.2%、C) 陸上・14.7%、D) 水泳・9.0% の割合が示された。

ここでは、男女共に学習指導要領に示されている共通必修の授業時数の割合としての30~40%の範囲内にあり、ほぼ同様の結果が示された。

また、第1選択必修の内訳は、男子において、格技・18.2%、球技・38.1%の割合となり、女子においては、ダンス・15.9%、球技・30.8%の割合が示された。

尚、第2選択必修の内訳は、男子 6.5%・女子 12.4%の割合が示された。

この結果から、第1選択必修においては、男子の球技の割合が多く、女子においては、授業時数の割合とほぼ同様の割合が示されているといえる。また、選択必修が男子 62.8%・女子 59.1%と半数以上の割合を占めている。

以上のことから、共通必修・選択必修と2つに区別してみると、選択必修の方を取り扱う割合の方がやや多いことがいえる。

これは、個人的に行う種目より集団的に行う種目の数値が多いという傾向が示されたといえる。

授業において、教師の指導が行ないやすいという点で、選択必修が多く取り扱われる理由のひとつになるのではないだろうか。

次に球技に関してみると、男子 38.1%のうちバスケットボール・10.5%、サッカー・10.5%、バレーボール・10.1%、ハンドボール 3.8%、ラグビー・3.2%の順に示しているように、バスケットボール、サッカー、バレーボールの3種目に重点を置いて取り扱っている傾向がみられる。尚、女子 30.8%のうち、バレーボール 12.5%、バスケットボール・12.4%、ハンドボール・5.6%の順になっており、特にバスケットボール、バレーボールが主に取り扱われている傾向がみられる。

第2選択に関しては、男子 6.5%、女子 12.4%とい

表 1 都道府県別高等学校及び資料数

	高校総数	資料校数	資料校数		%資料回収率
			男	女	
北海道	318	44	36	31	13.8
青森	91	16	16	11	17.6
岩手	98	6	5	5	6.1
秋田	80	18	17	13	22.5
宮城	103	16	10	9	15.5
山形	78	11	11	11	14.1
福島	112	24	17	20	21.4
東北	562	91	76	69	16.2
茨城	107	34	22	20	31.8
栃木	78	29	20	17	37.2
群馬	79	19	14	10	24.1
千葉	149	20	17	18	13.4
埼玉	159	25	22	18	15.7
東京	450	171	108	95	38.0
神奈川	200	49	41	45	24.5
関東	1,222	347	244	223	28.4
新潟	148	33	11	24	22.3
長野	108	14	13	11	13.0
富山	56	14	14	14	25.0
石川	62	13	12	12	21.0
福井	36	2	2	2	5.6
北信越	410	76	52	63	18.5
静岡	133	45	36	38	33.8
山梨	47	11	11	10	23.4
岐阜	90	19	18	12	21.1
愛知	204	63	59	54	30.8
三重	73	10	10	9	13.6
東海	547	148	134	123	27.1

	高校総数	資料校数	資料校数		%資料回収率
			男	女	
滋賀	48	8	8	8	16.6
京都	94	12	11	8	12.7
大阪	244	40	36	26	16.3
兵庫	214	38	37	33	17.7
奈良	50	4	4	4	8.0
和歌山	52	7	7	5	13.5
近畿	702	109	103	84	15.5
鳥取	37	7	7	7	18.9
島根	55	6	6	5	10.9
岡山	109	22	21	17	20.2
広島	139	41	40	32	29.5
山口	90	23	23	19	25.6
中国	430	99	97	80	23.0
徳島	55	6	6	5	10.9
香川	43	11	10	9	25.6
愛媛	70	14	14	13	20.0
高知	51	11	11	6	21.6
四国	219	42	41	33	19.2
福岡	174	32	30	27	18.4
佐賀	43	13	12	12	30.2
長崎	94	11	8	7	11.7
熊本	84	19	14	9	22.6
大分	73	11	11	7	15.1
宮崎	61	19	19	14	31.1
鹿児島	108	8	5	8	7.4
九州	637	113	99	84	17.7
沖縄	51	8	8	8	15.7
	5,098	1,077			21.1

(昭和 53 年 文部統計要覧)

表 2 年間指導計画

学 期	月	I				II				III		
		4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3
学 年	男	体 操	サッカー		水 泳	器械運動	ハンドボール				バスケットボール	持久走
	女	体 操	バレーボール		水 泳	バスケットボール	陸 上			持久走	器械運動	ダンス
年	男	体 操	陸 上		水 泳	バレーボール	器械運動				ラグビー	持久走
	女	体 操	陸 上		水 泳	ダンス		持久走			バレーボール	
年	男	体 操	バスケットボール		水 泳	ラグビー				鉄 棒		
	女	体 操	ハンドボール		水 泳	バスケットボール				卓 球	バドミントン	

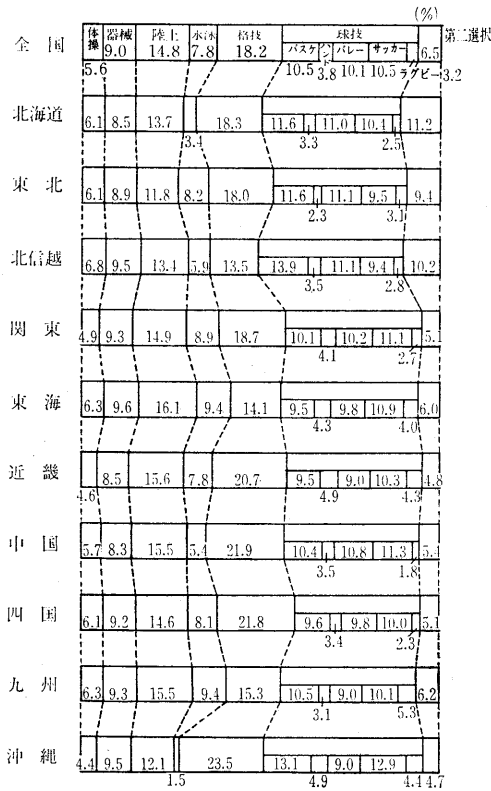


図 2-1 男子地域別

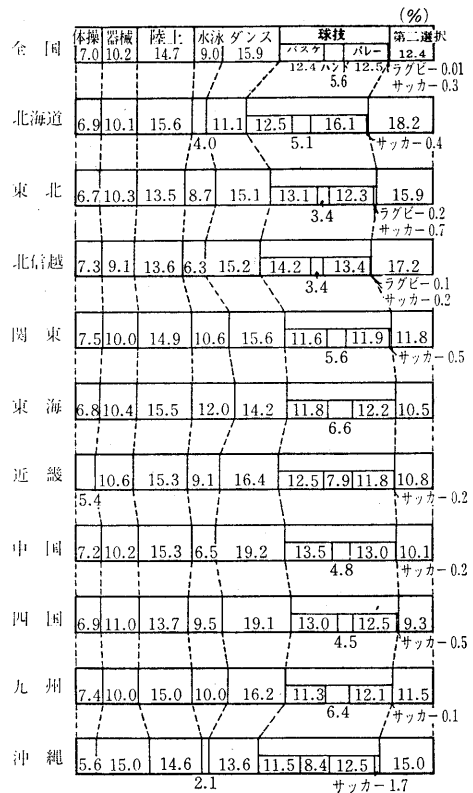


図 2-2 女子地域別

う数値が出ているが、各地域の土地柄・学校の方針などにより、多少の違いがみられる。

以上のような結果から、全国的にどのような内容がどのくらいの割合で取り扱われているかが理解できたり、学習指導要領との関係も理解することができた。

各地域の特色など、細かい点については、次に示す通りである。

(1) 地域的特色

ここでは、図 2-1、図 2-2 に基づいて、全国と比較しながら各地域の特色をあげてみた。

1) 北海道

水泳が極端に少なくなっている。これは、気候や施設の問題からであろう。

第 2 選択は非常に多く行なわれている。これは、冬季におけるスキー・スケートなどが含まれているせいではないか。

共通必修と選択必修との割合に分けてみると、後者の方が多いいのは、第 2 選択が増えているからでもある。

2) 東北

陸上は、他の地域に比べ割合が低い。

水泳では、割と気温の低い地方にしては、割合が多い。これは、施設の関係もあるだろう。

第 2 選択においては、スキー・スケートが多いため割合も高い。

3) 北信越

水泳の示す割合が少ない。

球技が多く行なわれている。これは、グラウンド・施設の関係もあろう。

第 2 選択においては、スキー・スケートの割合はそれほど多くなく、他の種目を行なっている。

格技の割合が少ない。

4) 関東

全国平均とほぼ同じ割合である。これは、資料数が多い為、全国平均値に及ぼす影響が多い為だと考えられる。

水泳はやや多い。これは、全国各地の中でも学校数が多く、施設も完備されている為、水泳の時間を多く取り入れている所が多いせいでもあろう。

5) 東海

全国平均とほぼ同じである。

陸上と水泳の割合が多い。

格技の割合が少ないのが目立つ。

6) 近畿

男女とも、ほぼ全国平均と同じ割合で行なわれている。これは、施設・設備の関係が整っている為ではないだろうか。

7) 中国

水泳の占める割合が少ない。これは施設が少ない為であると思われる。

格技が多い。

球技に関しては、ラグビーが少ないのは、施設・用具の問題があるのではないか。

女子において、ダンスの占める割合が比較的多い。

8) 四国

格技・ダンスとともに平均値を上まわっており、この種目に力を入れていることがうかがえる。

海で囲まれた土地だけに、水泳の占める割合も多い。

球技、第2選択の割合が低くなっている。

9) 九州

水泳が多く行なわれている。これは、気候的に温暖である為、他の地域より長い期間授業が行なわれる為であろう。

格技が少ない。

球技においては、ラグビーが多いのは見逃がせない事実である。

10) 沖縄

資料数が少ない為、確実性はないが水泳が非常に少ない。これは、施設も少なく、海に囲まれており、いつでも泳げる環境にある為に、特にとり出して行なう必要はないのではないだろうか。

次に、地域を男女別に分析すると、男子において、沖縄の共通必修 27.5% と低い割合が示されたことは意外な結果といえよう。

特に水泳の1.5% は驚くほど少なく、体育施設の不足があげられる。

ところが球技については、全国的に多く、中でも、沖縄の44.3% は驚くべき割合である。

また、第2選択必修としては、北海道・東北・北信越に多く示されている。これは、冬季スポーツとして、スキー・スケート等の種目を取り扱われるからであろう。

女子においては、共通必修の割合がやや多くそれ程変化がみられない。水泳については、男子と同様なことが

いえる。

球技については、全国的に授業時数(割合)の範囲内にあるといえる。また、第2選択必修としては、男子と同様の地域に多く示された。

以上のことから、地域別にいえることはほとんどが、授業時数(割合)の範囲で地域の特色を考慮しながら体育授業を実施し、生涯体育の基礎をつくらせているものといえる。

(2) 月別の傾向

ここでは、それぞれの地域の各月における傾向を男女別にあげてみると次のようになる。

1) 4月

男子

- 全国的に体操が多く行なわれている。
- 全国的に球技の中では、バレーボールが多く行なわれている。
- 第2選択のばらつきが少ない。

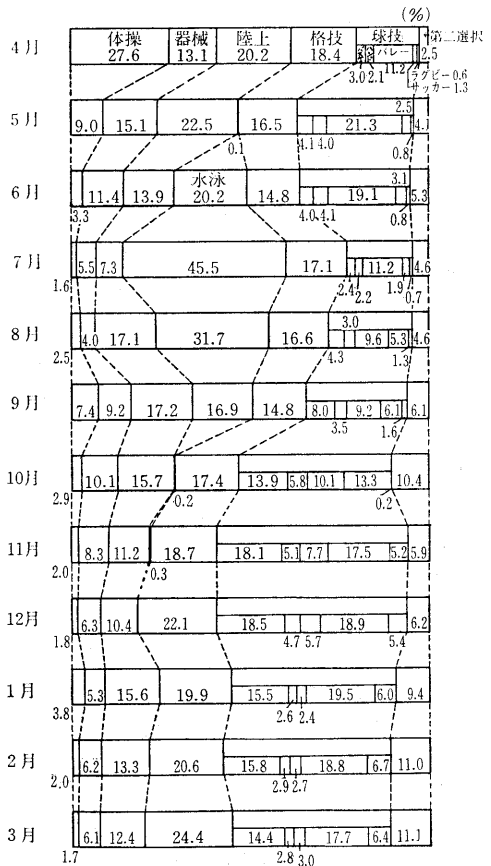


図 3-1 男子全国月別

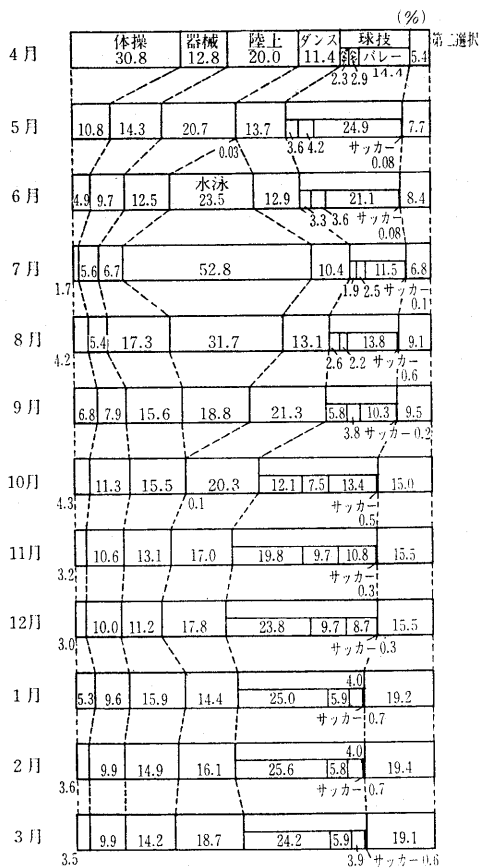


図 3-2 女子全国月別

・東北、北信越は陸上が多く行なわれており、北海道では雪が残っているようでグラウンド使用不可の為か少ない。

女子

- ・全国的に体操が多く行なわれている。
- ・北海道では、体操・器械が多く、陸上が少ない。陸上が少ないのは、男子と同理由の為と思われる。
- ・北信越の器械は他地域に比べ少なく、陸上が多い。
- ・近畿の第2選択が多い。

2) 5月

男子

・全国的に4月に比べ体操が少なくなっている。その代わりに球技・陸上が多くなっている。

- ・北海道は体操・器械の個人的スポーツが多く行なわれている。
- ・北信越の陸上が他地域に比べ多く行なわれている。
- ・近畿では水泳が行なわれはじめる。

女子

・全国的に球技の中でバレーボールの占める割合が多くなり、体操が少なくなっている。

- ・北信越の陸上は4月と同様に多く行なわれている。
- ・北海道の器械が他地域に比べて多く行なわれている。

・四国のダンスが他地域に比べて多く行なわれている。

- ・近畿の第2選択が多く行なわれている。

3) 6月

男子

・全国的に水泳が多くなり、体操・器械が少なくなっている。

・北海道・東北・北信越では、まだ気候的に適さない為か水泳よりも格技・陸上の方が多く行なわれている。また、気候の良い沖縄では水泳の占める割合が少ないのは、施設あるいはカリキュラムにとりあげて行なわれていないのではないと思われる。

女子

- ・男子と同様、水泳が多く行なわれている。
- ・北海道の陸上が多くダンスが少ない。

4) 7月

男子

・全国的に水泳が圧倒的に多く行なわれている。6月と同様、北海道では気候的にみて少ない。それに対し陸上が多く行なわれている。

・中国の水泳は他地域に比べ少ない。これは施設の問題があるのではないだろうか。

女子

- ・男子と同様、水泳が主に多く行なわれている。
- ・東北では、7月に集中して水泳を行なっている。これは気候的に適している為ではないだろうか。

5) 8月

男子・女子

・北海道・東北・北信越では冬の休暇が多く、夏の休暇が少なく8月の後半から授業が行なわれる所が多い。また、夏の休暇中である地域もある為、資料不足で参考にならないようである。

6) 9月

男子

・全国的に球技が最も多く行なわれている。球技の内容も平均して行なわれている。

・全国的に体操の占める割合がわずかに多くなっている。

- ・北信越では体操が少なく、第2選択が他地域に比べ多く行なわれている。

- ・北海道の陸上が多く行なわれているのは、気候的グラウンドの使用状況によると思われる。

女子

- ・全国的にダンスが多く行なわれている。

- ・男子と同様、陸上が多く行なわれている。

- ・ほぼ男子と同様な傾向を示すが、北信越男子において体操の占める割合が少ないが、女子では平均的に行なわれている。

7) 10月

男子

- ・全国的に球技が多く行なわれており、内容ではバレーボールに代わってバスケットボール・サッカーが多く行なわれている。

- ・北信越の球技が他地域に比べ多く行なわれている。

- ・関東・東海では、まだ水泳が行なわれている。

- ・四国の第2選択が多い。

女子

- ・男子と同様、球技が多く行なわれており、内容ではバスケットボール・ハンドボール・バレーボールが平均して行なわれている。

- ・全国的に第2選択が多くなってきた。第2選択の中で軽スポーツが多く行なわれているのではないだろうか。

8) 11月

男子

- ・全国的に球技が多く行なわれており、50%以上を占めている。

- ・北海道・東北・北信越では、陸上が少なくなっている。

- ・関東で水泳がわずかに行なわれている。

女子

全国的に球技と第2選択の増加がみられる。

- ・球技においてはバスケットボールが多く、東海・近畿はハンドボール・バレーボールがバスケットボールと同じ割合で行なわれている。

9) 12月

男子

- ・全国的に11月と同じようである。

- ・球技では、ラグビーが多くなってきた。

- ・北部では陸上が少ない。南部では陸上がある程度占めており、長距離走がとりあげられていると思われる。

女子

- ・全国的に11月と同じように、球技・ダンス・第2選択の占める割合が多い。

- 北海道では体操・器械に代わり、球技の占める割合が多い。

- ・北信越では器械が多く行なわれている。

10) 1月

男子

- ・全国的に球技が主に行なわれており、内容としてはバスケットボール・サッカーの割合が多い。

- ・体操・器械は気候の関係か、占める割合が少ない。

- ・北海道・東北・北信越では、球技の次に第2選択の割合が多い。これはスキー・スケートの占める割合が多くなっているのではないだろうか。

女子

- ・全国的に球技の示す割合が多いが12月に比べると多少減少してきており、陸上・器械・体操が増えはじめている。

- ・男子と同様、北海道・東北・北信越では第2選択が多い。

11) 2月

男子

- ・全国的に球技が多く行なわれている。なかでもラグビーが全国的に増えている。

- ・第2選択は地域的にかなりばらつきがあるが、北海道では1月に引き続き多い。

- ・北信越の器械が多い。

女子

- ・全国的に球技が多く、第2選択・ダンス・陸上の割合がほぼ同じ割合で行なわれている。

- ・北海道の第2選択は半分以上を占めている。

- ・第2選択で南部の方は、リクリエーション的の種目が多く行なわれているのではないだろうか。

12) 3月

男子

- ・全国的に球技の割合が多い。内容ではバスケットボールよりもサッカーの方が多く行なわれている。ラグビーも増えてきている。

- ・北信越の器械は、9月より徐々に増え、12月より3月まで非常に多く行なわれている。

- ・近畿・中国・四国の格技が多い。

女子

- ・全国的に球技が多く行なわれているが、1・2月よりも減少している。

- ・北海道・東北の北部及び九州・沖縄の南部において

第2選択が多い。

IV. ま と め

全国高等学校 5,098 校中 1,077 校、21.1% の回収資料を集計検討したわけであるが、共通必修男子で 37.2%、女子で 40.9%、選択必修として男子は 72.8%、女子で 59.1% の割合を占めている。特に選択必修の中の第2選択を取り扱うことに、地域の特色や学校の方針及び独自性などがうかがえる。

日本における四季の変化に伴う、気温や雨・風・雪・霜・日射量など自然現象は、カリキュラム編成に大きな影響を与えていると思われる。又、施設・用具の完備・不備も生徒の興味づけやカリキュラム編成を大きく左右するであろう。そのあたりのことを第二報で研究してみたい。いずれにしろ、私達体育指導者の創意と工

夫・情熱によって、体育授業が展開され、生涯体育として「運動の生活化」により貢献がなされる必要がある。

今後の課題として、本研究で十分明らかにできなかった「運動の生活化」が、どのように行なわれているかを明らかにする為に、学校での体育授業内容が、地域の生活の中にどのように影響しているか等の関連をみるのが、重要であると思われた。

今後これらのことを調査し、研究を深めて行きたい。

参考文献

- 文部省：高等学校学習指導要領解説，保健体育編，昭和54年5月。
岡田俊彦：教科教育，「体育」，55年版。
佐々木吉蔵：スポーツ法令便覧，55年版。
文部省：文部統計要覧，55年版。
理科年表。